

地形の決定に際して地質構造をも吟味するのであつて、この方面に注意を拂はずに斷層地形を決定する地形學者は、日本と米國とに極めて少數見出されるだけである。そして日本と米國とから、最も多くの地形斷層が報告されて居るのは、疑ふことの出来ない事實なのである。

文 献

- (1) 辻村太郎 東北日本の斷層盆地 地理學評論 第八卷 昭和七年。
- (2) 辻村太郎 斷層谷の性質並びに日本島一部の地形學的斷層構造 地理學評論 第二卷 大正十五年。
- (3) Yabe and Tayama: Hôjô trough. Bull. Earth. Res. Inst. 10, 1932.
- (4) 鈴木好一 神奈川縣厚木町北方の鮮新統 地質學雜誌 第三十九卷 昭和七年。
- (5) 帷子二郎 地殼變動論 岩波講座(地理學) 昭和七年 十三頁以下。
- (6) 井上春雄 東京文理科大學卒業論文、要旨は今年六月の日本地理學會例會で發表した。猶地理學年報第一卷參照

熱 河 雜 觀

(其の一)

上 治 寅 次 郎

一、錦綉山河

熱河省建平縣公署の門柱に「錦綉山河還舊主」と墨痕鮮かに書いてある。流石に文辭は巧であ

る。熱河省は萬里の長城以北にあつて、吾人には東部内蒙古の南部として知られ、元は遊牧の朔北民族の占據する地方であつたが、約二百年前から農民たる漢族の集團移民が南方より移住

し來つて、新主となつた。伐るを知つて植うるを知らざる漢人は樹を伐り、根を掘り、以て薪となし、錦綉の山河をして、全く荒廢の山河たらしめた。緑の山野に馴れた吾人の眼には動もすれば滿洲の山野が荒漠として映ずるかもしれぬ。然るに熱河旅行者が滿洲に歸りて、滿鐵沿線の景觀に接し、且つ文明の恩恵を滿喫したときは、恰も天國に遊びたるが如き爽快を覺ゆるの一事を以てしても、熱河が如何に荒廢せるかの一端を窺ひ知ることが出來やう。今や、この荒れたる山河は再び舊主に還つたのである。さて如何なる文化の種子を植付け、如何にして再び錦綉山河の淨土を出現し、萬民の福祉を増進せしむるかは、囑望さるゝ今後の問題たるに他ならない。

二、熱河省へ

熱河討伐が一段落を告げるや、關東軍では直ちに五班より成る資源調査團を派遣することゝ

なつて、熱河開發の第一歩は始つた。各班は鑛産・農産・畜産・林産及び經濟等の調査員及び助手・通譯等を以て組織し、本年三月下旬から四月中旬にかけて、熱河省へ向けて新京を出發したのである。

著者はその調査團の第二班に加はつて、熱河省の中央部たる赤峰・建平・凌源一帯を調査する命を受け、三月十九日内地を發し、五月二十三日内地に歸つた。その間、熱河省を旅行せしこと約五十日、出發の頃の滿洲は、楊柳も未だ芽を出さぬ冬景色であつたが、歸着の頃は池塘の楊柳、萌え出る若葉、まさに滿洲は潑刺たる初夏の新裝に蘇生して居たのであつた。

三、錦州

奉天から奉山鐵道によつて南西に向へば、汽車は遼河沿岸の新民・打通線の分岐點打虎山・營口支線を分つ溝帮子の諸驛を経て、六時間にして錦州に着く。

錦州は遼西地方の都邑としては、古い歴史と新しい將來を有する點で第一位にあり、城内

第一圖 錦州市街と古塔

遙に見ゆるは東門である



に假政府を設け、張作相を首班としたが、昭和七年一月三日室師團長の入城前に既に、西に向つて潰走して居た。

錦州は熱河省に向ふ鐵道の分岐點に當り、且つ熱河省への飛行機の發着地として、現今に於

には約千年前の建立なりと傳うる
苦むしたる
古塔、高さ
三十九丈が
夢の都の空
に聳へて、
昔の文化を
物語つて居
る。(第一圖)

張學良はこ

ける唯一の熱河關門に當り、熱河鐵道建設事務所・錦州警備司令部・兵站司令部・鐵道線區司令部等があつて繁華と雜沓を極めて居る。

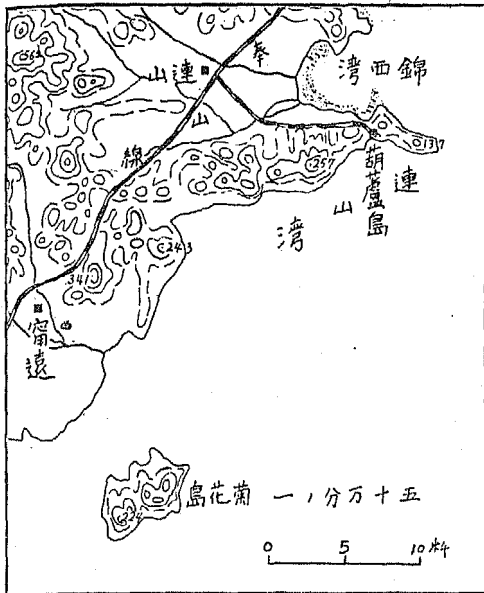
四、連山灣と葫蘆島

錦州の南西約四十軒、渤海に斗出する小半島を葫蘆島と呼び(第二圖)、長さ十軒、巾一―四軒、主として珪岩・頁岩及び震旦系の珪質石灰岩より成る。半島の北なる灣入を錦西灣、南なる灣入を連山灣といひ、錦西灣は水淺くして岩礁點在するも、連山灣は水深くして港灣に適する。灣の南方には菊花島と呼ぶ小嶼がある。

葫蘆島の築港は既に一九〇八年(光緒三十四年)に計畫され、英人をして調査・設計せしめ葫蘆島を商港とし、菊花島を軍港となす計畫を以て着工したるも中止し、其後一九一三年、一九一六年、一九二三年等に屢々工事を繼續せんとせしも果さず、一九三〇年には五ヶ年半の計畫を以て六四〇萬弗の豫算を計上して着手し、

竣工後は船體四〇〇呎のもの九七隻を繋船し得る豫定であつた。菊花島には既に海軍兵學校が建設され、鐵道も本線連山驛より分れる支線をも完成した。民國が連山灣築港の完成に多大の努力を惜まなかつた理由は、茲に述ぶる限りでないが、築港が完成し、滿鐵の平行線路たる打

第二圖 葫蘆島附近見取圖



通線によつて西滿洲・內蒙古の農産を連山灣に運ぶこととなり、既に計畫され、一部開通せる錦州より熱河省赤峰方面への鐵道の完成を見た曉には大連は相當の打撃であつたことは推測に難くない。然るに幾度となく計畫されて、而も工事の進捗を見ず、半成の基礎工事も、破壊の儘に捨てられて今日に及び、轉々憾慨を深からしめる。

葫蘆島は港灣としては大連に劣るも、營口の如く河流の沈積物による埋没の憂なく、不凍港に非らざるも、冬季と雖も船舶の出入に大した障害なく、ことに後背地として廣大なる西滿洲の平野と熱河省とを有するを以て、將來に於ても重要性を有する良港灣たるを失はない。

五、山海關の戰跡

長城を絶好の防禦物として、こゝに陣地を構へた敵は、こゝを最後とばかりに頑強に抵抗を試みたのであるが、昭和八年一月三日の總攻撃

で、果なくも遂に潰滅の運命を辿るの止むなきに至つた。山海關の大和旅館主人の案内にて、戦跡を訪へば、長城々壁の内部に坑道を穿ちてその中に籠り、空襲も、砲撃も、物かはと我が軍に多大の損害を與へたのであつたが、我は砲

第三圖 山海關の守備兵



彈三百發を以て長城の一角を破壊し、之を突貫道路として、遂に敵を撃退せしめたといふ。長城上には陸軍歩兵大尉兒玉利雄、同吉田勝次郎

歩兵曹長稻澤碧、同伍長植山啓藏、警察隊長半澤良知の諸勇士の勇敢なる戦死を傳える白木の記念碑が建てられてある。激戦の當時、我が勇士は繩梯を以て城壁に登らんと試みしこと、敵が巧に手榴彈を利用せしことなど、當時の戦況を警備の衛兵から眼のあたり聞いて、憾慨を一入深からしめた。

山海關から驢馬に跨つて角山寺に至る。寺は山海關北方の角山の中腹にあつて、眺望豁達、眼下に彼我對陣の陣地が手にとる如く見える。警備の衛兵は防禦の土囊の影で頻りに彈丸の装填に熱中して居た(第三圖)。

六、内地の人々

熱河討伐は目醒しく進捗して、錦州から熱河に向つた一隊は北票(二月二十四日)・朝陽(二月二十五日)・建平(三月二日)・赤峰(三月五日)・凌源(二月末)・承德(三月四日)といふ様に大體の匪賊を長城線に押し逃した。更に通遼方面から

熱河に向つた一隊は開魯(二月中旬)より下窪を過ぎて三月三日頃には赤峰に入り、更に承德方面の討伐を行つた。かくして本年三月の初旬までに熱河の主要部は大體平定を見たのであるが、五月十一日から始つた古北口の總攻撃までには、冷口・喜峰口等の長城難關方面に於ては討伐が未だ行はれつゝあつた。

兵站は勇士の活躍と相待つて活動せねばならない。其他、補給、慰安等も必要である。茲に於て勇敢なる内地の人々は、戰の餘燼も厭ふことなく、陸續として熱河に入り込むことゝなつた。旅館・料亭・商工業者等は各地に營業を開始し、忽ちにして、新しき經濟活動が熱河の各地に始まるに至つた。錦州憲兵隊では、一つにはこれ等熱河を目指して入る人々の便利を計り、他には不用意の人々の入省取締りの爲めに、一々熱河入りの許可證を下附して制限を計るの餘儀なきに至つた。三月から四月末日までに約二千七百人、五月十日までに三百人、計五月十日

までに三千人の許可證を下附してゐる。その他鐵道敷設の爲めの測量、其他一團體に一個の許可證を與へたものを合計せば五月十日までに約

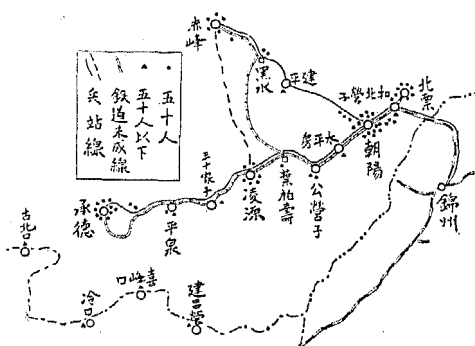
第一表 熱河入省許可人員

(錦州憲兵隊調)

行先地	四月末マデ	五月一日ヨリ 五月十日マデ	合 計
扣北營子	二七五	二九六	七四
北票	二七五	二九六	七四
朝陽	五三〇	九五	三〇四
凌源	二一三	三三	二四六
平泉	七九	三三	八二
承德	四一〇	五六	四六六
建平	二九	六	三五
承德	一八〇	三二	二一五
赤平	二一	一三	三四
建平	一〇	〇	一〇
建昌	一〇	〇	一〇
喜峰口	一〇	〇	一〇
冷口	一〇	〇	一〇
古北口	一〇	〇	一〇
三十家	九一四	一二	九三三
兵站線	九一四	一二	九三三
合 計	二七五四	三〇四	三〇五八

五千人の入省者があつた見込であるといふ。これ等の入省者の分布は第一表及び第四圖の通りである。

第四圖 熱河省内地人分布圖



入省の内地人は軍關係者・政治工作員・道路

建設従業員・酒保商人・旅館・料亭營業者及家族・使用人等を主とし、多くは内地人相手の職業を目的とするもので、未だ遠大の目的を有し永住の希望を抱いて入省して居るものは多くはない。熱河に不用意に入省して困ることは多々あるが、食料品・其他日常品の供給困難なる點もその一つであつて、土着人と同様の生活をなす覺悟がなくてはならない。赤峰の物價を二三記して見る。

高粱一升九錢、粟一升二十五錢、大麥一升十錢、大豆一升十六錢、白砂糖一斤二十四錢、石油一箱十三圓、鹽百斤八圓、鷄一羽五十錢、卵鷄七個十錢、牛肉一斤十二錢、朝鮮白米一升約一圓五十錢等。

(未完)